令和6年度　学習分析事業　改善計画シート　三原市立第三中学校

【別紙】

1．本年度の結果

①学力定着分析　NRT　偏差値平均（全国を50とする）

		国語	社会	数学	理科	英語	全体
1年	前年度結果 偏差値平均						
	本年度結果 偏差値平均	49.1	49.8	49.5	48.5	51.1	49.4
2年	前年度結果 偏差値平均	47.7	49.7	47.0	47.3	48.2	48.0
	本年度結果 偏差値平均	50.6	48.6	47.1	45.6	47.4	48.2
3年	前年度結果 偏差値平均	49.5	50.6	47.4	48.1	48.1	48.7
	本年度結果 偏差値平均	50.4	48.3	45.6	50.8	47.8	48.1
全体	前年度結果 偏差値平均	48.6	50.2	47.2	47.7	48.2	48.4
	本年度結果 偏差値平均	50.0	48.9	47.4	48.3	48.8	48.6

②全国学力・学習状況調査　正答率平均（第3学年対象）

教科	国語	数学	英語
前年度結果 （対県比）	72.0 （103）	46.5 （94）	45.9 （106）
本年度結果 （対県比）	60 （103）	50 （96）	

2　令和5年度について

①調査から明らかになった課題

【年度当初の学力について】（NRTをうけて）
学校としての課題は、「基礎的事項の習得」及び、「問題を正確に読み取る力の不足」である。
●国語では、1年生の漢字の書き取りが全国比7と著しく低く、全6問中、通過率が20%台の問題が3問もあった。2、3年生ではいずれも、「当てはまらないもの」を選ぶ問題の通過率が2年：29%、3年：13%と低く、問題を「最後まで読んでいない」「思い込みで解いている」状況が見て取れる。これは、他教科でも見られる傾向で、3年生の社会でも、「含まれていないもの」を答える問題の通過率（57%）が、全国と比べて25%も低かった。
●数学では、一次関数の傾きに関する問題の通過率が14%と低い。問題や会話文からグラフの傾を読み取ることができていない。伴って変わる関数が実生活に深くかかわっていることや、良さ・有用性が実感として持てていない。
●英語では、正しく書くことに課題があり、通過率の低さが、いずれの学年も「語順に対する理解の不足」「語彙の不足」によるものだった。特に1年生では、通過率0%の問題が2問あり、「自分に関する英語を書く」領域が全国比30だった。2、3年生でも、2年：10%、3年：34%と、低い通過率であった。

【年度当初の学力について】（全国学力・学習状況調査をうけて）
●国語では、「漢字の書き取り」「古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉える」問題に課題があった。書き取りでは、「推しはかる」という漢字の正答率が46%だった。「推す」という漢字は「推し活」のイメージが強いためだと思われる。「古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉える」問題では、正答率が56.2%であり、問題を読めない課題がある。
●数学では、「自然数」「平面の決定要件」「反比例の比例定数」「四分位範囲」の問題に大きな課題がある。特に「四分位範囲」では全国平均より17.2%も低く課題は顕著である。数学的な用語を用いて表現し合う場が不足している。同類項のみまとめる計算も70.3%と全国平均-10.2%であり、単位数量に拘る意識付けが徹底されていない。
●英語では、まとまりのある英文を書く、内容を話すに課題がある。大問8(2)では、正答率が21.0%であり、英作文の条件を満たしていないものが29.7%であった。大問10においても、条件を満たさない誤答が50.0%であった。「話すこと」においても、〔発表〕の問題が著しく正答率が低いことから、まとまりのある文を書くこと、考えることに課題があると考えられる。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標　（何を、どの程度達成するか）	達成のための具体的取組　（どのようにして）	スケジュール	検証の指標・目標
【授業改善を通した学力・学習意欲の向上】 ○ 全教諭が「伝える」に力を入れ、パブリックスピーキング能力を向上させる。 ○全ての授業で「授業づくりの徹底5項目」に基づく指導[①めあての提示、②めあての焦点化、③思考時間の確保、④ペア学習・グループ学習、⑤めあてに対する振り返り]を完全実施する。 ○ 全教諭が「問いの設定」を意識することで、つけたい力をより明確にした指導を徹底する。 ○各教科で培うべき知識や技能の確実定着と活用場面を設定した「生きて働く学力」を育む。 ○主体的・対話的な学習を通して「深い学び」に迫るアウトプットを重視する。	①NRTの誤答分析による実態把握と改善計画の立案 ②学校経営会議において改善計画の共有 ③全体研修による目指す授業の共有 ④一人1指導案による研究授業 ⑤授業交流週間（1学期：3年部、2学期：2年部、3学期：1年部） ⑥非連続型テキスト問題（全国学力調査過去問題）実施 （各教科の単元末、GKタイム期間集中実施試験形式によりフルバージョン実施） ⑦無答率の分析・個別指導（再テスト含む）・積み残しの復習 ⑧学力補充指導の組織的な展開とともに、生徒のアウトプット評価、変容の追跡調査による分析と指導方法の改善 ⑨家庭学習の充実と定着　⑩「まとめ」と「振り返り」の徹底	①6月 ②6月 ③4月、7月、8月、11月、2月 ④通年 ⑤1学期に2週間程度 ⑥各教科単元末 令和7年2月GK集中実施 2月下旬、3月中旬 ⑦定期試験実施後、通年 ⑧8月推進委員会 ⑨通年 ⑩12月「振り返り」の交流と研修 より良い「振り返り」を記載	○ Q-U2回目の学習意欲の数値 （全学級で全国得点+1以上） ○ 標準学力調査（3学期実施）で　全国比100を超える学年・教科を増やす。 ○定期試験等における記述型問題の無答率半減 ○1時間以上家庭学習を行う生徒の割合70%以上 ○「まとめ」と「振り返り」により『深い学び』に迫る授業実施80%以上
【学級・学習集団づくり】 ○全学級において「三中スタンダードの遵守」を徹底する。 ○全校での「三中チャレンジカップ」を通して、クラスや縦割り学級の団結力や生活規律・学習規律の向上を目指す。 ○ピグマリオン効果が実感できる生徒理解とともに、自己存在感が高まる評価や支援を実施する。	①Q-Uの分析による実態把握と改善計画の立案 ②Q-Uの分析、実態把握のために校内研修を実施。 ③学校経営会議において、各学級の事態と改善計画の共有化。 ④「心の中の整理箱」を活用した面談により、生徒の心身の状況を把握し、早期発見と早期解決。 ⑤学級目標や具体的な行動目標を設定するとともに、小刻みに自己評価と他者評価を実施。	①6月 ②8月 ③毎月 ④毎学期 ⑤毎月	○Q-U2回目において、一次支援数値の向上（全学級） ○生徒アンケート 「先生や友達は相談できる」「自分には良いところがある」の肯定的意識 ＋5%

3　令和6年度について

①調査から明らかになった課題

【学力調査について】
（NRTをうけて）
●国語では、主題や構成を読み取る（2年：27%）、心情の読み取り（3年：10%）に課題があった。
●数学では、方程式（2年：39.1%）、二元1次方程式のグラフ（3年：27%）に課題があった。
●英語では、放送問題（1年：29%）、前置詞の適語補充（3年：12%）に課題があった。
（全国学力・学習状況調査をうけて）
●国語では、3―二「文の成分の順序や照応の正確さ」について求められる問題の正答率が45.9%であった。文節相互の係り受けの基本的な知識・技能の学習定着に課題がある。
●数学では、「文字を用いた式で表す」「等式の変形」「回転移動」の問題に大きな課題がある。特に「文字を用いた式で表す」問題では全国平均より16.8%も低く課題は顕著である。基礎・基本的な知識や技能の定着に課題がある。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点取組等

重点取組上記課題を踏まえたもの）	具体的方策(継続して取り組めるもの）	検証指標及び時期
【学力向上ついて】 ・自分の考えをまとめる ・情報の正確な読み取り ・基本的な知識・技能の定着	①全学年全教科等でのR80の実施（必須） ②線や印をつけて読むことの指導 ③GK（学力向上）タイムを活用した小テストの実施	○標準学力調査（3学期実施）で、全国比100を超える学年・教科を増やす。 ○標準学力調査（3学期実施）で、無答率を減少させる。
【学級・学習集団づくりについて】口 ・安心できる居場所づくり ・児童生徒が主体の絆づくり	①行事を中心とした「三中チャレンジカップ」の企画。 ②生徒会活動の活性化（「三中チャレンジカップ」の企画 ③委員会活動による自治活動や絆づくりのできる活動企画）	○Q-Uの結果の比較（2回） ○生徒アンケートを実施する（2回：1学期、3学期）